

〈実践報告〉

「古典」教材を現代に引き付けて 読ませる一つの工夫

——入門期の古典教材を使って——

奥村剛士

一

第六集に少し記したが、近年「古典」と「現代文」との連関性というものがしきりに叫ばれている。然し現実には、「古典」教材と直ちに結び付けられる様な「現代文」教材が見つかるケースはあまり多くない。又、仮りになんらかの教材を捜し出して来得たとしても、古典教材との結び付けはかなり強引なものになり兼ねない。

そこで私はそうした無理をするよりも、古典教材そのものを、出来るだけ生徒自身の現在に切り結ぶような形で指導してゆきたいと考えている。（無論、古典教材との連関性に於て最適な現代文教材がある場合には、それを使うことに吝かなものではないが。）

そんな考えに基づいて本年実践した、拙い報告を以下にさせていただきます。

二

対象は、言う迄もなく一年生である。又、時期は五月の初めである。

教材は『宇治拾遺物語』の巻第一の中の一文であるが、短い文であるので、全文を掲げる。

これも今は昔、田舎の児の比叡の山へ登りたりけるが、桜のめでたく咲きたりけるに、風の激しく吹きけるを見て、この児はさめざめと泣きけるを見て、僧のやはら寄りて、「などかうは泣かせたまふぞ。この花の散るを惜しうおぼえさせたまふか。桜ははかなきものにて、かく程なくうつろひさぶらふなり。されども、さのみぞさぶらふ。」と慰めければ、「桜の散らむは、あながちにいかげむ、苦しからず。我が父の作りたる麦の花の散りて、実の入らざらむ思ふがわびしき。」と言ひて、さくりあげて、よよと泣きければ、うたてしやな。

右の文を私は、二回範読し、次に教室全体で数回音読させ、更

に数名の生徒に指名読みをさせてから、現代語と仮名遣いの異なっている（発音の違う）文字を指摘させた。——この教材は、一年生になってから二つ目の教材であったので——

その次に私は、重要語に関して、活用する語は終止形を板書してやりながら全員に辞書を引かせた。——私は三年生になってからでも、この教室で辞書を引かせるという作業を最も重視している。又、たとえ教科書の脚注にある単語でも必要性のある単語に関しては必ず辞書で確認させることにしている。——

その上で適当な生徒を指名して、あらすじを言わせてみた。この程度の教材であると、どのクラスでもほぼ間違いなくあらすじを言える様である。——実は私は、現代語訳に先立って先ずあらすじを捕らえるという作業が極めて重要であると考えている。何故なら古文は、最終的には現代語訳に依るのではなくして、古文の言葉そのままで、丸ごと飲み込めることが肝要であると私は考えるからである。へ無論実際には進度が進めば進むほどそれが困難になって来る事も確かなものではあるが——

さて、その後一応の現代語訳を口頭で与えてから、次のような質問を生徒に放った。

「ところでこの文の作者は、児の発言・行動を『うたてしやな』と批評しているが君達はどう考えるか」と。

すると、どのクラスでも概ね次のような答えが返ってきた。

曰く、「児の言動は至って親しい言動で、少しも非難するに当たらぬ。むしろ感心すべき言動だ。」

曰く、「この僧の発言の方が庶民の現実を知らない発言で一面

的なものの見方しかできていない。」等々。

そこで私は、はたと膝を打つ仕種をして褒めてやり、

「よくそこに気がついた。確かに諸君の言う通りだ。古典の世界で良いとされることが現代では通じないことも大変多いのだ。」と一応持ち上げて置く。

その上で、この時代と現代ではものの価値観が違うこと、特に中古から中世の中ごろにかけての貴族の社会では、何にもまして美意識というものが大切にされたのであると言うことを、史的背景とともに説明した。

だが、ここで授業を終わったのでは、この教材を十分にこなしたとも、この教材を現在に引き付け切れたとも言えない。

そこで今度は次のような質問を發して見た。

「ところで、さっきの質問と関係するのだが、もし本文が、『我が父の作りたる麦の花』ではなくて、『我が作りたる麦の花』となっていたらどうだろう。諸君はやはりさっきと同じ感想を持っただろうか。それとも少し違う意見がでて来るのだろうか。」と。

すると、果たせるかな、今度は「そういう事になると話は少し変わって来る。いかにも児は自分の利益の事しか考えないで、風流を理解できない人のように思えて来る。」という発言が各クラスとも出てきた。

私はそこを捕らえて、「実はこの『古典教材』の持っている重要な意味はそこにこそあるのだよ。」と語った。そして、今君達が語ってくれたような事は、多くの人々が自分の目先の利益しか考えない、外国の人々からエコノミックアニマルと呼ばれている

様な現代の日本人、いや、僕や君達こそ深く考えてみなくてはならない事なのではないだろうか、と問いかけた。

そして更に、『古典』というものは、多くの時代をくぐり抜けて、なお現代になんらかの価値と意味とを持っているものをそう呼ぶのだけれども、今教科書で学んだ文章も、少し見方を変えて読んだならば、やはり現代に住む僕達に少なからぬ問題を投げかけてくれる『古典』と言ひ得るのではなからうか。今後『古典』の教材を読んでゆくに当たっては、以上のような点に十分注意を払って読んでゆくことにしよう、と呼びかけて当該教材の授業を閉じた。

三

以上誠に拙い、又、是式のことば、否、もっと工夫に満ちた授業を、どなたも実践して居られることと考えるが、私としては日頃心がけていることが比較的スムーズに行えた授業だったので、恥を忍んで報告させていただいた次第である。

たゞ一つ最後に申し添えたいことは、「古典」と「現代文」との連関の授業なり、「古典」を生徒の「現在」に引き付けて行なう授業なりは、どの教材でも必ず出来るものではないし、敢えて無理にもそれをしようとするならば、多分にこじつけ的な授業になってしまう可能性があることと、教師が常に意識を研ぎすませて教材を眺める努力をしてゆかないと、なかなか「古典」と「現代文」なり、生徒の「現在」との連関性が見えてこないということである。

(佼成学園女子高等学校)

『早稲田大学国語教育研究』第九集原稿募集

次の要領で原稿の募集を致します。奮ってご投稿ください。

- ・ 四百字詰原稿用紙三十枚程度の論文。
- ・ 原稿用紙十枚程度の実践報告（まとまった内容でなくても結構です。新しい教育実践の中間報告などを期待しています）。

・ 日々の教育の中で感じておられる悩み、喜び、現場の近況報告、その他いろいろなご感想などを、原稿用紙二三枚にまとめてください（掲載の際には匿名も可）。

- ・ ご投稿の際にはコピー二部を添えてくださいますようお願いいたします。

なお、投稿の締切は、昭和六十三年十月末日（必着）です。詳しい内容については、編集委員会宛お問い合わせください。